

孤独が癒されるとき

―老・病・死の中で

藤澤暲正

目次

一、五つの恐れ……………	2
二、孤独ということ……………	8
三、悲しみの中に在っても……………	16
四、仏のいのちとともに……………	24

一、五つの畏れ

日本の歴史の中で、最も悲惨な戦と言われたのは保元元年（一一五六）に京都で起こった保元の乱でありました。これは、皇位をめぐつて不満を持つ兄の崇徳上皇と弟の後白河天皇が激しく対立し、公家も武士も、親子兄弟が敵味方に分かれて争う内戦でありました。

当時、武士は公家に仕えていたのですが、この内乱の様子を詳細に記したものに『保元物語』（作者不詳）という書物があります。この軍記物の中に、天皇側についていた源義朝（頼朝・義経の父）が上司の信西から、親・兄弟を捨てて天皇側についたのは殊勝なこと、このたびの戦の大將に任ぜられたからには、忠功を励むようにと言われます。信西は、義朝の父である為義や弟の為朝が上皇側についているのを知って、そのように語ったのでありましょう。その

とき義朝は、

死は案の内の事、生は存の外のことも也。

と信西に申したのです。この言葉は、死ぬのは思っていた通りになることであり、生きるの思ってもいないことであるという意味ですから、義朝が戦場に赴く決意のほどを示した言葉であると思われれます。

しかし私たちは、いつもそのような思いで生活しているかという点、全く逆の思いを抱いています。死ぬということは思いがけないことであり、生きるということとは当たり前のように受けとめています。したがって、蓮如上人が『御文章』の四帖目四通に、

それ、秋も去り春も去りて、年月を送ること、昨日も過ぎ今日も過ぐ。いつのまにかは年老のつもるらんともおぼえずしらざりき。

（『註釈版聖典』一一六六頁）

と述べられているように、死のみならず生そのものさえもすっかりみつめないで、いたずらに年月を重ねるのみの日送りをしがちなのが私たちの実情です。

よく「すいせいむし酔生夢死」という言葉が用いられますが、人生をただ通過するだけのよう生き方を持ちやすい私たちは、今一度「死は案の内、生は存の外のこと」という義朝の言葉を確認な事実として考え直してみたいものです。そのことをしっかりと



胸にたたみこむことによって、この一度しかない人生をどう生きるのが本当なのかという極めて大事な問題に目が向けられてゆくのでありましょう。

私たちは、生きてゆくこの人生の中で、さまざまな問題に出会って苦悩します。見通しの利きかない人生の岐路に立って戸惑こうことも一度や二度ではありませんが、凡夫とは畏怖いふしん心の去らないものと言われていますが、何かにつけて不安を抱き、取り越し苦労をしたり、畏れ怖おそくことが少なくないのです。

仏教では、私たちは五つの畏怖心を持つてしていると説かれています。その一つは、この命をどのように活かすかという畏れです。これは「かづみょうい活命畏」と言われているもので、健康体であれ、病者であれ、男女・老若を問わずにかかえている畏れです。また、人間は非常に自尊心が強いので、他人からとやかく言われることを嫌います。「あくみょうい悪名畏」というのは、悪い評判を気にする畏れですが、日常生活でも、他人の口を気にすることを私たちはしばしば経験いたします。